

平成 30 年度スポーツ庁委託事業

Special プロジェクト 2020

(特別支援学校を対象とした全国的なスポーツ・文化大会の開催支援事業)

第 3 回全国ボッチャ選抜甲子園

委託事業成果報告書

一般社団法人日本ボッチャ協会  
全国ボッチャ選抜甲子園実行委員会

## 目次

1	はじめに	3
2	事業の目的	4
3	実施日程および会場	4
4	事業の実施体制	4
5	実施報告	5
6	事業の成果と課題	7
7	今後の方向性について	9

## 1 はじめに

2020 東京パラリンピック競技大会が近づくにつれ、全国的にパラスポーツへの興味関心が高まりつつある。特に、ボッチャについては、子どもから大人まで障がいの有無に関わらず楽しめる競技として、全国的に人気が高まってきている。

全国の特別支援学校および特別支援学級等に通う児童生徒の皆さんにとってもボッチャは身近なスポーツであり、重度の障害があってもパラリンピックの日本代表選手を目指すことができるスポーツの一つである。

それを受けて、本事業は全国の特別支援学校および特別支援学級等に通う児童生徒の皆さんが目指す目標の大会として、子どもたちが憧れる日本一の大会として発展していくことを目標としている。

大会出場をきっかけに、全国の特別支援学校および特別支援学級等に通う児童生徒の皆さんが生涯にわたってスポーツに親しむこと、日本選手権出場や日本代表選手として活躍することを目標として「競技」としてボッチャに取り組むこと、また若手選手の発掘育成につなげることを目的に開催している。

本報告書は、第1回大会からの成果と課題をまとめることにより、第3回大会の成果と課題、事業の今後の方向性についてもとめたものである。

## 2 事業の目的

- ① パラリンピック正式競技であるボッチャの特別支援学校への定着を図るとともに、大会が日々の学習の成果を発揮する場とする。
- ② 特別支援学校に通学する児童・生徒が、東京パラリンピックを身近に感じ、意欲的に日々の体育学習に取り組めることを目指す。
- ③ 大会参加においてマナーの習得および、ボッチャを通じた選手同士の交流を図り、生涯スポーツへの意識を高める機会とする。
- ④ 将来ボッチャ選手として活躍を目指す人材の発掘の機会とする。
- ⑤ 大会を通して審判員の技術力の向上、指導者の指導力向上の場とする。

## 3 実施日程および会場

日程：平成 30 年 8 月 8 日(水)

開会式 10:00～

試合開始 10:30～

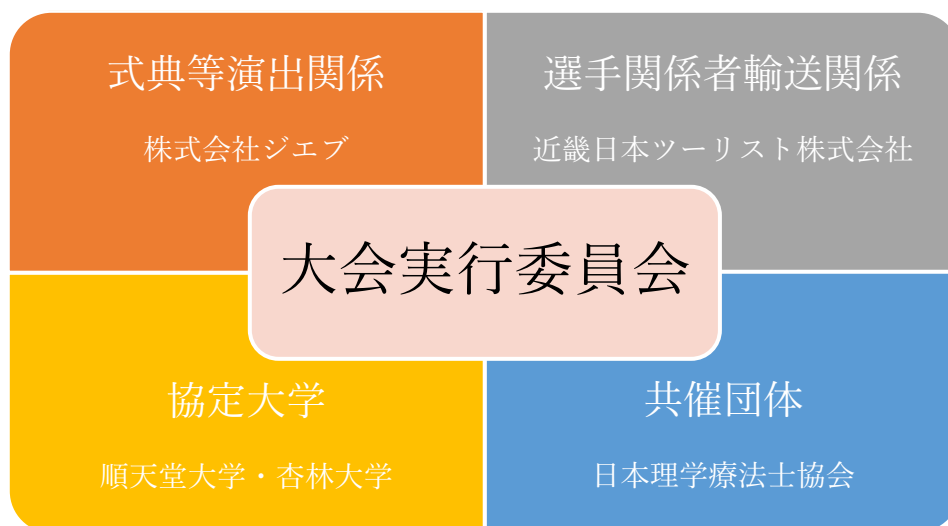
閉会式および表彰式 16:00～

場所：港区スポーツセンター

## 4 事業の実施体制

今大会は大会実行委員会を立ち上げ、外部と連携しながら運営している。

- ① 競技に関わる運営：実行委員会
- ② 輸送に関わる運営：近畿日本ツーリスト株式会社コーポレートビジネス
- ③ 大会式典等演出に関わる運営：株式会社ジェブ
- ④ 共催団体：公益社団法人日本理学療法士協会
- ⑤ 協会協定大学：順天堂大学・杏林大学



## 5 実施報告

### 【参加校について】

団体戦（1チーム：3名＋控え選手1名） 24校によるボッチャ大会

No.	ブロック	学校名
1	第2回大会優勝校	東京都立村山特別支援学校
2	第2回大会準優勝校	愛知県立小牧特別支援学校
3	21世紀枠 (実行委員会選抜チーム)	都立砂川高等学校・都立八王子拓真高校合同チーム
4	東北ブロック	青森県立八戸第一養護学校
5	東北ブロック	山形県立ゆきわり養護学校
6	関東ブロック	東京都立府中けやきの森学園
7	関東ブロック	東京都立鹿本学園
8	関東ブロック	千葉県立船橋夏見特別支援学校
9	関東ブロック	茨城県立下妻特別支援学校
10	関東ブロック	群馬県立あさひ特別支援学校
11	関東ブロック	埼玉県立熊谷特別支援学校
12	北信越ブロック	福井県立福井特別支援学校
13	北信越ブロック	富山県立高志支援学校
14	北信越ブロック	石川県立いしかわ特別支援学校
15	東海ブロック	愛知県立豊橋特別支援学校
16	東海ブロック	瀬戸市立瀬戸特別支援学校
17	東海ブロック	愛知県立一宮特別支援学校
18	東海ブロック	豊田市立豊田特別支援学校
19	近畿ブロック	大阪府立藤井寺支援学校
20	近畿ブロック	大阪府立茨木支援学校
21	近畿ブロック	大阪府立光陽支援学校
22	中国四国ブロック	広島県立広島特別支援学校
23	九州沖縄ブロック	長崎県特別支援学校合同チーム
24	九州沖縄ブロック	沖縄県立鏡が丘特別支援学校

【総来場者数】 約 1,000 名

選手：92名 来賓：20名

関係者：390名 一般：約 180名

プレス：21社 39名 スタッフ：280名

- 今回で3回目となる大会では、過去の2大会から大会名を「全国ボッチャ選抜甲子園」と変更した。これは、大会の目的の一つでもある、若手選手の育成発掘ともつながっており、子どもたちが競技としてボッチャに取り組んで、その成果を発揮できる場としての位置付けを明確に示すためでもある。
- 今大会より参加校数を絞り、書類審査を通った24校で予選リーグ戦を行い、勝ち上がった上位チームで決勝トーナメントを行う方式を採用した。そのことにより、大会の競技性を高め、全国の特別支援学校および特別支援学級等に通う児童生徒の皆さんが、日本一を目指して戦う大会として位置付けをすることができた。

### 【大会の様子】



開会式の様子

鈴木スポーツ庁長官より祝辞



競技の様子

車いすの選手、立位の選手が共にチームを組んで戦う



競技の様子

手投げの選手とランプ  
を使って競技アシスタ  
ントと共に戦う選手も  
共にチームを組んで戦  
う



競技の様子

日本代表に選出された  
選手も、お互い学校の  
代表として出場し、日  
本一を目指して戦った

## 6 事業の成果と課題

### ① 参加校数（応募校数）の変化について

第1回大会は、江東区の東京文化スポーツ会館（Bumbu）で開催した。全国大会と言っても、参加校は22校で合同チームもあり、チーム数では18チームの参加であった。

第2回大会は大会のことを知って参加したいという学校が増え、申し込みは前年を大幅に上回る36校であった。そこで、実行委員会内で検討した結果、1回戦からトーナメント戦にすることにより、申し込み全校を受け入れることとし、場所を港区スポーツセンターに移し、大会規模を大きくして開催した。

第3回大会は、前回大会同様の36校の応募があったが、第2回は参加チームが多かったことから初戦からトーナメント戦で戦い、負ければ終わりという激戦を勝ち抜く大会となった。負ければ1度しか試合ができないため、サブコートで交流試合ができるようにしたが、遠くから参加していた学校からは、もっと試合ができるようにできないかという意見が多く聞かれた。また、安全面からももう少し学校数を絞って開催したほうが、より安全に開催することができるという意見も上がった。

そのことから、募集の際には、各都道府県や各区の教育委員会からの推薦状やチームの戦歴等を提出していただき、選考委員会にて出場校を選考して決定した。そのことにより、選ばれた学校（チーム）のみが出場することができる大会として進化し、より全国大会としての価値が高まった。

- ② 今大会出身者が日本選手権大会等で頭角を現し、日本代表選手に選出されたという成果が見られる。そこに注目しているメディアも多くみられた。
- ③ 日本代表に選出する、あるいは日本選手権大会に出場し好成績を収めるなど、ボッチャ甲子園以外でも活躍している選手は、他の選手の目標となっており、学校関係者からは、生徒自身が目標とする選手と同じように活躍するためには、学校生活においてどう過ごしていくと良いのかと考えていくようになり、普段の学校での様子に良い変化がみられるという報告があった。
- ④ 今大会出場校の選手たちは、書類審査とはいえ選抜されたということで、学校やブロック代表として戦うという意識を持って大会に臨んでいる姿が多く見られた。
- ⑤ 遠方から出場する学校にとっては、参加にかかる旅費の負担が多く、そのため多くの学校がそれぞれに工夫を重ねている。例えば、地元企業との連携により、スポンサーとして遠征費用を補助してもらい、あるいは地元の障害者スポーツ協会と連携をして、クラウドファンディングにより遠征費用を確保する、そのほか都道府県に参加にあたり推薦状を出してもらい、自治体から補助を受けるなど、ボッチャ甲子園への出場が障害を持つ子ども達と社会との繋がりに一役かっているといえる。

このように、大会開催や出場にあたっては地域との連携が不可欠である。

- ⑥ 大会開催において、一番の課題は、選手の受け入れについてである。  
第2回大会より参加希望校が増え、港区スポーツセンターに会場が移った開催となったが、選手のほとんどが車いす使用者のため、混雑時間帯に公共交通での移



動が困難になるため、安全面を考慮し、品川駅等から会場間を輸送することにした。そのため、前大会よりも多くの資金を必要になったが、スポーツ庁の委託事業として開催できたことと合わせ、委託会社との連携により、輸送用車両を十分確保することができ、安全に開催することができた。そのことにより、参加者が練習の成果を十分に発揮できるよう、準備の時間も確保することができた。

- ⑦ 競技運営においても、専門の業者へ委託、連携により予選リーグと決勝トーナメントの実施から、センターコートでの決勝戦、オリンピックとの交流、世界で活躍するボッチャ甲子園大会出場者の紹介など、大会の競技性が高まり、参加者の今後の競技意欲に十分繋がる、特別支援学校の日本最高峰のボッチャ大会と格を上げて開催することができた。

## 7 今後の方向性について

この大会は特別支援学校のボッチャ日本一を決めるということ以外にも若手選手の発掘という意味もある。この大会出場をきっかけに、日本選手権出場を目指す選手が増え、育成選手に選出される選手もでてきた。回を重ねるごとに、全国大会として子どもたちの目標となる大会へと進化するとともに、教育機関を通して卒業後を含めた社会とのつながりを生む大会となった。

今後は、各県や各ブロックで予選会を行い、地域社会と連携の中、予選を勝ち上がった学校（チーム）が、「全国ボッチャ選抜甲子園」に出場する大会となるのを目標として、大会を作り上げていきたいと考えている。

今後さらに、地域との連携、各県の教育委員会との連携で、より社会的意義のある大会にしていきたい。